



# —2011年度春季展示室だより—

土浦市立博物館

平成23年5月14日発行(通巻第15号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5～6月)・夏(7～9月)・秋(10～12月)・冬(1～3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介しますものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(15) 古写真 「田植えでのひとこま」



### 目次

|                      |   |
|----------------------|---|
| ○古写真・絵葉書にみる土浦(15)・・・ | 1 |
| ○博物館からのお知らせ・・・       | 1 |
| 【館長講座及び各展示と催し物等】     |   |
| 古代の仏具・鉄鉢形土器(古代)・・・   | 2 |
| 中峰和尚所用の禅版(中世)・・・     | 3 |
| 地理学者山村才助の業績(近世)・・・   | 4 |
| 色川御蔭の『防逆水私議』(近代)・・・  | 5 |
| 水辺のなりわい(近代)・・・       | 6 |
| ○市史編さんだより・・・         | 7 |
| ○霞短信「土浦の街を案内する」・・・   | 8 |
| ○コラム(15)・・・          | 8 |
| ○情報ライブラリー更新状況・・・     | 8 |

市内、現在の港町での田植えでの風景。昭和40年ごろ。手拭いを姉さん被<sup>かぶ</sup>りにして麦わら帽子をかぶる、紺の着物に股引<sup>ももひき</sup>すがたの女性たち。田植えは手間取りの女性たちもふくめ、家族総出で行われました。  
【情報ライブラリー検索キーワード「田植え」】

## 博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 常陸国から東アジア世界へ、最新の考古学の成果をお話します。

5月15日(日)・6月19日(日) 時間:午後2時～(1時間30分程度) 会場:視聴覚ホール

★★春季展示解説会★★ 春季展示の見どころを、学芸員がご案内致します。

5月21日(土) 「色川御蔭の『防逆水私議』—土浦の洪水対策を考える—」

5月28日(土) 「水辺のなりわい」 時間:各回午後2時～(30分程度)

6月4日(土) 「中峰和尚所用の禅版」 会場:展示室3

6月11日(土) 「地理学者山村才助の業績—「訂正増訳采覧異言」—」

6月18日(土) 「古代の仏具・鉄鉢形土器」

★★土浦ミュージアムセミナー2011「歴史から学ぶ—霞ヶ浦と土浦」★★

土浦地域の歴史について、学芸員の研究成果をお話します。

時間:各回午前10時～11時半まで

7月2日(土) 「中世土浦宗教事情—忍性・無住・復庵をとおして—」

会場:視聴覚ホール

7月9日(土) 「土浦周辺の祭り—水辺のトウや祭祀を中心に—」

定員:各回50人(要申込み)

7月16日(土) 「土浦幼稚園にみる近代の土浦」

受講料:各回50円(資料代)

※申込は、6月1日(水)より上高津貝塚ふるさと歴史の広場(電話029-826-7111)にて受付開始。

★春季展示は5月14日(土)～6月26日(日)までです。「霞」第16号は7月1日(金)発行予定です。★



博物館マスコット  
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

## ぶつぐ てっぱがつた 古代の仏具・鉄鉢形土器

僧の持つ重要な仏具のひとつに、鉢があります。現在でも「托鉢」という言葉が残っています。鉢は梵語を語源（梵語「鉢多羅」の略。僧侶が托鉢の時に用いる鉄鉢の意）とし、古代では仏への供養具としても用いられました。鉄鉢が尊ばれたようですが、遺跡から出土する鉢は土器で作ったものが多く、鉄鉢形土器と呼ばれています。

霞ヶ浦土浦入りの北岸にある田村・沖宿遺跡群のうち、石橋北遺跡からは平安時代前期（9世紀）の須恵器の鉄鉢形土器が完全な形で出土しています（下の写真）。石橋北遺跡ではお寺の跡は見つかりませんが、隣接する寺畑遺跡と長峰遺跡では、仏堂と呼ぶにふさわしい小規模なお寺の跡が発見され、「千寺」、「千手寺」という寺名、「案豊」という僧名などを記した墨書土器が出土しています（「霞」第10号「市内の集落遺跡と墨書土器」）。石橋北遺跡の鉄鉢形土器も、こうした村のお寺を拠点に遊行する僧の活動がその背景にあり、法会などの際に供養具としてもたらされたと推測されます。

市内北部を流れる天の川左岸に位置する今泉町根鹿北遺跡では、平安時代前期の9世紀頃に作られた小さなお堂の跡やそこに納められた瓦塔、瓦堂と呼ばれる素焼きの小型の塔や堂が見つかりました（「霞」第1号「瓦塔・瓦堂」）。お堂に奉納されたと思われる鉄鉢形土器は下半部だけしか残っていませんでしたが、底の部分に墨で「佛」と書かれています。仏への供養に用いられたのでしょう、鉄鉢形土器が仏具であることをよく物語っています。

石橋北遺跡の鉄鉢形土器は、天の川流域の東城寺から今泉にかけての山麓にあった「新治古窯址群」と呼ばれる窯で焼かれた須恵器です。数多く焼かれた日常雑器の甕や杯などに比べると、器面が平滑になるよう丁寧に仕上げられ、薄く入念に作られています。もともと鉢が金属であることを意識し、それを模倣しようとしたためであると考えられます。

以上のように平安時代の当地域では、村々には僧の活動を支えるお堂が建てられ、僧が用いる仏具も地元で焼かれるなど、仏教信仰が広く民衆にまで浸透し、地域に根づいていた様子がうかがわれます。

（塩谷 修）



石橋北遺跡出土の鉄鉢形土器（当館所蔵）

6/18（土）午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 寺に関わる墨書土器
- 根鹿北遺跡の瓦塔・瓦堂
- 東城寺寄居窯跡の須恵器（いずれも古代コーナーに展示）





ちゅうほう

ぜんばん

## 中峰和尚所用の禅版

中峰和尚（1263～1323）は、中国の元時代に西天目山（現中国浙江省）の正宗禅寺で活躍した僧で、没後に普応国師の称号を贈られた著名な禅僧の一人です。

市内高岡にある大雄山法雲寺には、中峰和尚所用の禅版が伝来しています。法雲寺は復庵和尚が開いたお寺ですが、復庵和尚は、中国に渡って中峰和尚に学んだことから、中峰和尚を開山第1世として自らは第2世となっています。復庵和尚は法雲寺を開くにあたり、正宗禅寺に使いを送っており、その際に中峰和尚の頂相（注1）や法衣などの遺品が贈られたことが分かっています。恐らくこの禅版もその内の一つと思われます。

禅版が収められている箱の蓋には「開山国師禅版 古錦欄袋 同 竹拂子 棕毛拂子」と箱書きがされており、「霞」第14号で紹介した棕毛払子と同じ箱に入っています。

禅版は坐禅を行なう時に使う道具で、元来は上部に小さな穴があって紐で吊るし、背中にあてて姿勢を正すために用いていました。後世では、坐禅を組んだ両足の上に置き、そこに禅定印の両手を乗せて用いるようになりました。この禅版には紐を通す穴がないことから、後者のようにして用いたと思われます。

禅版の表面には「萬法帰一、一帰何處一。」（ばんぼういつにきす、いついづれのところのいつにかきせん）と文字が彫られています。『碧巖録』（注2）の第四十五則「趙州万法帰一」で知られた公案で、全ての法則は一つに帰するというのが、何処の一つに帰するのかと問いかけています。ただし、この禅版には、最後に彫られている「一」が通常より一文字分多く彫られています。正宗禅寺では、中峰和尚の師である高峰和尚が、弟子の断崖了義（注3）と問答した公案として知られています。

この禅版には、菊花模様の金欄刺繍袋が附随しており、箱書の「古錦欄袋」がこれにあたるものと思われます。

（注1）高僧の肖像画。

（注2）中国宗代の禅文学の典籍。臨済宗で最も重視する語録。

（注3）断崖は中峰和尚と同じく、高峰和尚の法を受けた禅僧。

（中澤達也）



禅版と古錦欄袋 法雲寺所蔵(市指定文化財)

6/4(土)午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

●東城寺経塚出土品（複製）：銅製経筒、妙法蓮華経など  
（古代コーナーに展示）





# 地理学者山村才助の業績

ていせいどうやくさいらん いげん  
—「訂正増訳采覧異言」—

以前、世界図「坤輿万国全図」をご紹介いたしました（「霞」第5号）。これは土浦藩士で地理学者の山村才助（1770～1807）の所蔵品でした。

代々土浦藩に仕える武士の家に生まれた才助ですが、幼い頃から「輿地記載の書」を好んだと自ら語っています。また、地理書「采覧異言」を読んで大変感動したが、記事が十全でないことが残念でならなかったとも言っています。

「采覧異言」とは宝永6（1709）年に新井白石（1657～1725）が著した地誌で、多くの資料を批判、考証し不明な点は不明とした論述で、出版こそされませんでした。が学問を志す者の必読書として流布しており、若い才助の探求心をあおったのでしょう。興味深い内容なのに不備が多くて惜しいという強い思いが、才助に鎖国下の江戸時代において外国の情報を得る唯一の手段であった蘭学を学ぶことを決意させたのでした。医学を志す人が多かった当時の蘭学界において才助が世界地理を専門としたのには、こんな経緯があるので

す。

さて、才助は蘭学者大槻玄沢（1757～1827）の門人となって励み、ついに「訂正増訳采覧異言」を完成させました。この本は、まず白石の「采覧異言」の原文を正確に掲げ、その後に「昌永（才助の字）按ずるに（わたくしが推測いたしますには）」と断った上で、自分の意見を述べています。原文をひとつひとつ批判して訂正を加え、蘭書から得た新たな知見を付け加えるという形式で、書名に「訂正」と「増訳」の二語が加わっているのはそのためです。

「訂正増訳采覧異言」は地図1巻、本文12巻の大著となり、白石の「采覧異言」に比べると分量も内容も原著を超えるものとなりました。大半を才助の知見が占め、独自の著書といってもよい内容ですが、ヨーロッパに始まり、アフリカ、アジア、南方諸島、オーストラリア、アメリカと続く構成は「采覧異言」にならい、「采覧異言」に訂正と増訳を加えるという姿勢が守られています。幼い頃に抱いた志を、才助は貫徹させようとしていたのかもしれません。

時に享和2（1802）年、才助は33歳。のちに「訂正増訳采覧異言」は江戸時代の地理書の最高峰と誰もが認める著作となりました。

白石は「坤輿万国全図」を見て、「采覧異言」の構成を考えたと言われています。才助が参考にした数多くの文献のうち漢書の部の冒頭に「坤輿万国全図」が挙げられ、白石の跡を追った才助の軌跡を今に伝えています。

（木塚久仁子）



「第一巻 アジア諸国図」（当館所蔵）

6/11（土）午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 「坤輿万国全図」
- 「采覧異言」（いずれも近世コーナー「城下町の文化」に展示）





# 色川御蔭の『防逆水私議』

## — 土浦の洪水対策を考える —

土浦はたびたび水害にみまわれてきました。「霞」第6号では「大洪水文集」（昭和13年の水害にあった小学生の作文）、第8号では「洪水の写真絵葉書」（明治43年と昭和13年の記録）をご紹介しましたが、今回は江戸時代末期に記された『防逆水私議』という書物をご紹介したいと思います。

筆者である色川御蔭（1815～1873）は「霞」紙上に何度か登場している土浦の商人で国学者である色川三中の末弟にあたる人物です。『防逆水私議』は慶応元（1865）年に土浦の洪水の原因と対応についてまとめたもので、土浦の洪水は潮来十六島の新田開発による霞ヶ浦の逆水であると分析しています。

（前略）コノ新田出デ来テヨリ、新田ノ為ニ水害ヲ除カントスル堤防ヲ築キ田地ヲ囲ウニヨリテ、今ノ水吐キ悪シクナリテ、三股ノ海中ヘ逆水スル処 悉ク溢レ満チテ、湖水廻リノ田地、水腐リノ事始マリシト見エタリ。（後略）

潮来十六島は、現在の稲敷市東部から千葉県香取市などに散在した旧十六カ村のことで、かつては干潟でしたがやがて洲となり、江戸時代になり開拓された地域でした。年を経るごとに新田を守るための堤防が増える一方で、それが他の湖岸地域の水はけを悪化させることにもなったということです。土浦もそのひとつであり、「昔ト今ノ水嵩同ジ事ニテモ、昔十日ニテ引キ落トシタル水モ、今ハ二十日モ三十日モ掛カラデハ引キ落トサズ」と、土浦城下の水はけが年々悪くなったことを憂い、新田を増やすことは国益ではあろうが、実は損失も多いのだと述べています。

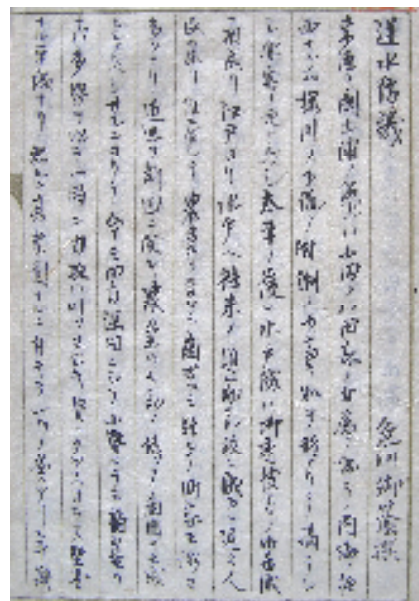
御蔭は土浦城下を水害から守るにはどうすればよいと考えたのでしょうか。道路を地上げすること、さらに埵樋（水の出入り口に用いる樋）や関柵（くだ状の竹木を地上に架設して水を通すもの）を用いた排水設備を設置し、小土手や置土などを整えて水の侵入を防ぐということ等を考え

ました。大規模な治水工事による、根本的な対策の必要性を訴えたのです。

しかし、「コノ水害ヲ除ク時ハ永々ノ国益ニシテ、ソノ救イハ算スベカラズ。」と述べながらも、費用の算出は行わず、「失費ヲ厭ウベキ事ニ非ザレバ、仮令後々ノ時ニ至リテモ、同志ノ人有リテコノ事ノ行ワレン時至リナバ、大幸ナラント思フ故ナリ。」と、のちに実行する人物の出現を期待してこの文章を閉じています。

果たして30年後にこの遺志は引き継がれました。御蔭の兄三中の孫にあたり県会議員を務めた色川三郎兵衛（1842～1905）は、鉄道の線路を霞ヶ浦沿いへ設置して堤防の役割を持たせることに奮闘し、明治28（1895）年には鉄道が開通、さらに霞ヶ浦の河口への川口閘門の建設にも尽力し、多くの私財を費やしたといえます。洪水対策への提言書『防逆水私議』は土浦を水害から守る手だてのひとつとして実際に活かされたのでした。

（野田礼子）



『防逆水私議』（当館所蔵）

5/21（土）午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 洪水の写真絵葉書（近代コーナーに展示）
- 色川三郎兵衛翁略伝（近代コーナーに展示）
- 「洪水の思い出」（近代コーナーメッセージ展示映像「体験談」）





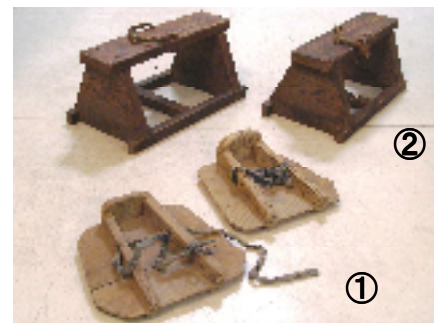
# 水辺のなりわい

## — マチの周囲に広がっていた水田 —

東日本大震災の影響が続いています。ご存知の通り、土浦の中心市街地は霞ヶ浦を望む低地にあり、地盤の弱いところ。近世から近代にかけて低湿地を埋め立てることで、市街地は拡大してきました。近世以来の水運が土浦を発展させてきた一方、先人たちは長く水害と闘ってきました。そして、今、震災からの復旧という新たな試練に立ち向かわなければなりません。

現在、住宅が建てこんでいる市街地中心部の東崎町<sup>とうざき</sup>では、昭和30年代ごろまで、町のなかを水路が流れていました。東崎町では、霞ヶ浦で漁をしたり、周囲に広がる水田で農業を営んだりする光景がみられました。東崎町のエビダル漁については、「霞」第2号でご紹介しましたので、ここでは水辺の農業について記したいと思います。

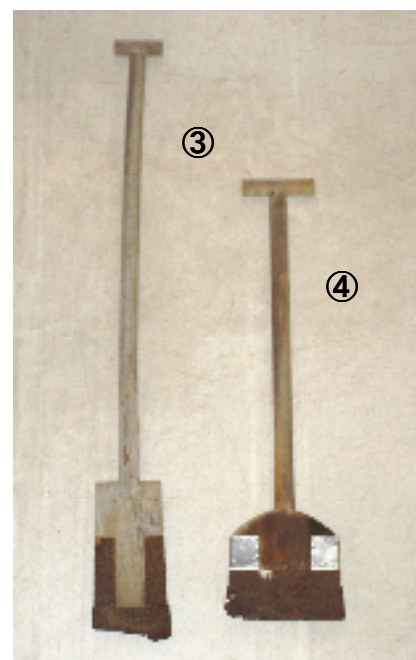
東崎町のある農家は、大正時代に久松五右衛門<sup>ひさまつごゑもん</sup>がすすめた耕地整理に協力したことが縁となり、現在の港町（土浦港の南側あたり）に水田を所有することとなりました。この港町の水田へは、東崎町の鎮守である鷲神社<sup>わし</sup>の前を流れる水路を、舟で移動したそうです。水田では写真①のような田下駄<sup>たげ</sup>を使用しました。稲刈りのときに、刈り取った稲株の上を田下駄で踏み、体が田に沈まないように注意しながら収穫をしました。そして、刈り取った稲を舟いっぱい積み上げ、自宅まで運び乾燥させたそうです。この農家では木田余<sup>きだまり</sup>（現在の土浦協同病院東側あたり）にも水田を所有していました。木田余の水田は港町のそれよりも深く、秋になると水がでて、ひざ上まで足が泥に沈んでしまうことから、写真②のような高い田下駄を使用したそうです。



田下駄(当館所蔵)

戦後、港町の深田に自家用の蓮根<sup>れんこん</sup>がつくられたことがありました。当時の蓮田では、水を抜いて、鋤<sup>すき</sup>で泥をかき分けながら蓮根の収穫を行いました。港町の蓮田で使用された鋤は柄が長く、鋤先の幅が短いものでした（写真③）。この長い柄の鋤とともに柄の短い蓮掘り用の鋤（写真④）、蓮掘り用の万能<sup>まんのう</sup>などを舟に積みこみ、蓮田へ向かいました。そして、泥の深さや人の沈み具合に応じて、道具を使い分けたそうです。もちろん、田の深い部分では、柄の長い鋤が使われました。土地の条件に応じて、細かな道具の使い分けがなされていました。

これらの道具が使用された場所は、現在では住宅やビルが建ち並んでいる地区です。この土地の成り立ちを示すと同時に、この地に農業を営んできた先人たちの苦労を教える道具でもあります。（萩谷良太）



鋤(当館所蔵)

5/28(土) 午後2時から  
このページで紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 田下駄
- 田舟
- 蓮掘り万能（いずれも近代のコーナーに展示）



# 市史編さんだより

## 〜〜 『土浦の文化財関係史料集』 発刊について 〜

土浦市には、国・県・市指定の文化財、国認定の文化財（重要美術品）、登録文化財（建造物）など 300 点近い文化財があります。これはその中から文字資料のみを集め、文字資料なので「史料集」としました。

文字資料のある文化財は、すべて目次に載せてあります。順序は国の文化財の分類にそって、Ⅰ 絵画・彫刻・工芸品・建造物関係、Ⅱ 書籍・典籍・古文書・記録類、Ⅲ 歴史・民俗資料、Ⅳ 石碑銘となっています。この中Ⅳの石碑銘だけは私独特の分類で、工芸品に分類されない石碑類を一括したものです。歴史・民俗・史跡などに関係する文化財の文字資料です。

収録の範囲は古文書や記録だけでなく、絵画は署名や賛、彫刻は仏像の内側にある墨書や木札、建造物は棟札や板書など指定内に含まれるもの、掛軸の軸や表装、入れ物の箱・袋など保存用付属物に書かれたものなどそうした文化財に直結するものも含めました。しかし、別に書かれた文献資料は含みません。

一般の方に読んで頂きたいのですが、注や解説は最小限に留めました。詳しい解説はまた後の方々の仕事として残すことにしました。土浦市教育委員会が図録の形で『土浦の文化財』を出版していますから、それと一緒に見て頂きたいと思います。その意味で、両者の関係が分かるように検索表を付けてあります。

文化財の中には、指定当時未発見かその意義が十分理解されなかったため、指定されなかったものがあります。それらの文化財の文字資料も、（付）という形で追加しておきました。将来その文化財を指定して頂きたいと思うからです。尤も追加はしても、文化財には一括指定という形がありますから、指定の件数は増えません。例えば般若寺の紀年のない結界石、まずは新たに市指定にするにしても、将来は県指定の結界石を「2基」にすればいいと思います。

（参考）とした史料もあります。指定外でも載せておきたいと考えた参考資料です。実は、他にも新たに追加指定して頂きたいものがありますが、新指定は今後の市の文化財行政にお任せしたいと思います。

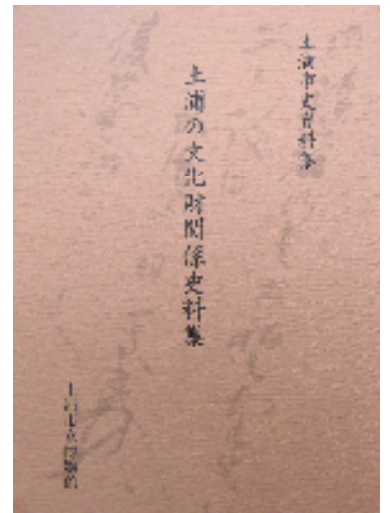
ここで取り上げた文化財は、今後市立博物館の季節陳列や企画展・特別展を通して、皆さんの目に触れる機会がある筈ですが、この本がそれらを深く理解するための手引きになればと念じています。例えば、般若寺の釈迦如来像の胎内木札や、海蔵寺阿弥陀如来像内の墨書、土浦城櫓門や粕毛の弥陀堂・中村西根の鹿嶋神社などの寺社の棟札、これらは今後修理の時でもなければ、関係者でさえ見る機会はないと思われます。

沼尻墨僊の『地球万国図説』は、私塾天章堂で教えていたことを纏めたものと思われます。当時の青少年の受けた教育の高さに驚くでしょう。因みに上野の国立科学博物館の常設展に、墨僊の子の墨潭らしい人が父の発明した傘式地球儀を示しながら、母子に地球の話をしている人形の陳列があります。ご覧下さい。

また、山村才助所蔵の利瑪竇（マテオリッチ）の写本「坤輿万国全図」には、単なる世界地図というだけでなく、豊富な天文・地球論が書かれていて、近世初頭の世界の学問的水準を知ることが出来ます。文章が漢文、地名も漢字で読みにくいですが、どう読むか研究するのも楽しいでしょう。

この史料集は、漢文や日本文でも漢字ばかり（和様漢文体と呼ばれています）の読みにくいものかもしれません。しかし、私たちの先人の残した貴重な遺産ですので、苦労しながらその跡をたどるのも、また嬉しいことではないでしょうか。

（市史編さん係嘱託・社会教育指導員 雨谷 昭）





「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、土浦市観光ボランティアガイドとして活動されている篠崎修一郎さんにご寄稿いただきました。

## 「土浦の街を案内する」

土浦は多彩な文化財、筑波山・霞ヶ浦などの自然の景観を持つ魅力的な街です。このような土浦の魅力を訪れた皆様に見て頂き、知って頂くことが大切であると思います。この役目を担っているのが、博物館であり、観光ボランティアガイドであると思っています。

私たち観光ボランティアガイドは現在 26 名で土浦を訪れるお客様を案内しています。団体に訪れるお客様に対する案内、週末に「まちかど蔵」を訪れる個人のお客様に対する案内、イベントの時の案内、自分たちで案内を企画し「広報つちうら」によって参加者を募集する案内などを行っています。

団体案内ではやはり土浦の歴史地区の案内を希望されるお客様が大部分です。この時には、博物館の見学をコースに織り込むことのお客様におすすめしています。博物館で土浦に関する知識を入れ、その後実際の物を見て頂く方がお客様の理解を得やすいと思います。特に土浦城の模型などを見て頂いた後に城址を案内し、模型で見たような本丸御殿がここに建っていたと案内すると、お客様も「なるほどね!」とイメージをふくらませます。

縄文時代の貝塚、明治時代の旧土浦中学校校舎、鎌倉時代の銅鐘、江戸時代の蔵づくりと、時代の広がりを感じられるこの街を案内すると、お客様は「土浦は歴史がある街」と感心されます。一方、真鍋のサクラ・亀城のシイなど、天然記念物にもお客様の関心が集まります。埼玉県の方達には霞ヶ浦をお見せしたときには「海だ」という叫び声が上がりました。

このような魅力的な土浦を案内し、お客様から感謝の言葉を頂く時、ボランティアガイドとしての喜びを感じます。今後とも博物館と土浦市観光ボランティアガイド協会の連携を深めたいと願っています。

(土浦市観光ボランティアガイド協会会長 篠崎修一郎)

## コラム(15)ー常総地域の遡源ー

本紙第 11 号のコラム(11)で、土浦の範囲や領域について思うところを述べました。地域のあり様は、地域の成り立ちにこだわって考えてみる必要があると思っています。土浦は常総地域の中核地として、そして水陸交通の要地として栄えてきました。常総地域は常陸南部から下総北部にまたがり、江戸時代以前は広大な内海の「霞ヶ浦水系」と深く結びついた地域でした。私は、その地域形成の萌芽が、3世紀後半に始まる古墳時代にまで遡ると考えています。

かつて常総地域は、内海を境に西の弥生文化とは一線を画していました。古墳時代になって東進する大和王権の強い影響力が波及し、この一帯もようやく東海道筋から到来する西方文化圏の仲間入りを果たし、新たな地域形成を促しました。今の「霞ヶ浦水系」と沿岸地域は内海だった往時の姿を残していませんが、古墳時代に何が生成され、後の時代に何が継承されたかを確かめることは、土浦や常総地域、つまり沿岸地域の将来を模索する上で、意味あることと考えます。

(塩谷 修)

## 情報ライブラリー更新状況

【2011・5・14 現在の登録数】

|     |            |
|-----|------------|
| 古写真 | 467 点 (+5) |
| 絵葉書 | 374 点 (+5) |

※( )内は 2011 年 1 月 5 日時点との比較です。  
展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1 ページでご紹介した絵葉書もご覧いただけます。

## 霞 (かすみ) 2011 年度 春季展示室だより (通巻第 15 号)

編集・発行 土浦市立博物館  
茨城県土浦市中央 1-15-18  
TEL 029-824-2928  
FAX 029-824-9423  
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6 ページのタイトルバック(背景)は、博物館 2 階庭園展示です。

2011 年度春季展示は、2011 年 5 月 14 日(土)~6 月 26 日(日)となります。「霞」2011 年度夏季展示室だより(通巻第 16 号)は 7 月 1 日(金)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。